

翻
訳

カミール・カステロ・ブランコ著『リスボンの謎』（4）

―第一之書、第十章から第十一章まで―⁽¹⁾

尾 河 直 哉

第十章

苦しみの多い人は、めったにない休息に恵まれても、苦痛と慣れ親しんでしまうものである。どんなに努力してもよりよい運命を引き寄せられないと悟ると、不幸な人間は、せっかく分け与えられた喜びまで自から放棄してしまう。

母が家にいないことを伯爵が知ったあとで、ベルナルドの語る話に耳を傾け、もっと聞きたがっている母の身に起こっていたことが、こんなつらい経験だった。

夫が自分の女中にたいして見せる節度のない甘やかしをベルナルドが語るとき、母が謎めいた薄笑いを見せることを当時のわたしも気づいてはいたが、あの薄笑いがいったいなにを意味してい

たのか、今ではもっとよく理解することができる。

自尊心を傷つけられ、奥方の誇りを蔑にされ、夫から完全に軽んじられ、女中ひとりのために夫婦の名譽まで犠牲にされて、侮辱で心を痛めつけられた母がやつの思いで引き出したのが、一見無関心なこの薄笑いだけだったのである。

だが本当に無関心だったのだろうか？

いやちがう。それは、ひとりの貴婦人が見せることのできる最も誇り高い反応だった。不幸のなかにあつてなお、最も卑しい行為さえ威厳をもって受け入れる懐の深い精神の、最も誠実な表れだったのである。

これがふつうの女だったら、夫と卑劣なライヴァルめがけて滝のような形容詞を浴びせかけたにちがいない。死刑執行人に呪い

の言葉を吐きつけ、覚えてなさい、いつかきつとあんたに復讐してやるから、不貞という高利を払ってまで妻を購うところを眼にした日には、あんたに赤っ恥をかかせてやるわよ、そう叫んでいだらう。

つらいことの多かった人生で、わたしは自分を母と比べる機会が多かった。自分が高貴な血筋を引いているという世迷言を信じながらも、わたしは「庶民」にまで身を落としていた。しかしあれから後、高貴な血筋という威光がたんなる幻想にすぎないことを教えたのは、他ならぬ貴族の女たちである。この女たちは、嫉妬がその青い血：つまり貴族の血を怒りで滾らせると、下品で卑しい憤怒の淵に身をおとしていたからだ。

ただ、こうしたことをあれこれ経験してきて、わたしはひとつの結論に達した。神によって組織され、人間に引き渡されて運営されているこの地球は、どう転んでも最悪の者の手に陥ることなどありえない、という結論である。

だがこれ以上抽象談議にふけるのはやめよう。わたしにとっても退屈だが、心を突き刺すこうした思い出を将来読んでくださる方々にも定めし退屈だろう。

ベルナルドが戻ってきたのは午後だった。わたしと神父は不安に怯えながら待っていたが、いっぽうの母は無関心なようすだった。少なくとも、夫から新たな苦しみがやってくるかもしれないという事態にかんしては、諦めの境地にあるようだった。

ベルナルドが顚末を語った。

「伯爵さまは十一時に起床ささいましたが、女中はそれより少し前に厨房に来て昼食を指示しました。あの娘の控えの間に盆をもつていったのはこのわたくしです。伯爵さまは女中を抱きかかえるようにして部屋から出ていらつしやいましたが、人生にすっかり満足なさっているようにお見受けしました。椅子にお座りになると、わたくしに退室するよう命じます。正午に呼び鈴がなったので盆を取りに行き、退室しようとする伯爵さまがわたしを呼び止め、伯爵夫人はもう起きているかとお尋ねになりました。存じ上げませんと答えると、それじゃあ見て来いとおっしゃいます。めんどろな事になったと思いました！ この危機的状況をどう乗り切ればよいかと。別のところではらく時をやり過ぎし、ちょうど良いころあいに行き、奥方さまはお部屋にいらつしやいませんと申し上げました。じゃあどこにいるんだとお尋ねになるので、存じ上げませんとお答えしましたところ、それじゃああちこち調べて来いとおっしゃいます。そこで伯爵夫人がどこにいらつしやるか知っているか召使いたちに尋ねまわりましたところが、みながみな知らぬ存ぜぬとの返事。これには驚きました！ 知っていると返事をする者がいてもおかしくなかったからです。伯爵さまのところに戻って、だれも奥方さまの居場所を知らないそうですと申し上げましたところ、眼を剥いてわたしをじつとご覧になり、悪魔のような声でこう叫ぶのです。

『だれがお前をこの家に呼び戻した？ おれはおまゑに暇を出さなかったか？』

この怒鳴り声にわたくしはすっかり気が動転し、あやうく息を詰まらせるところでした。

『それに、あの女はどこにいる？』

『存じ上げません、ご主人さま』

『あいつがどこにいるか口を割るまで縛り付けて黒人のように鞭打ちを喰らわすぞ、この食わせ者めが』

と伯爵さまがおっしゃいます。さすがのわたしもかっときました。わたしはつねづね慎重で神を恐れる男ですが、ここまで言われては相手がだれであっても同じです。怒りを抑えきれず、このわたくしをむりやり縛り付けるなどむずかしゅうございましょう、そもそもわたくしがこの屋敷におりますのも奥方さまがお呼びになったからでして、伯爵さまがおできになるのはせいぜいわたしを追い出すことだけです、それも賃金を支払ってから、と申し上げました。伯爵さまはわたしの顔になにか投げつけようとまわりを物色し始めました。いちばん近くにあったのが椅子です。もしエウジェーニアが伯爵さまの腕を取って優しい言葉をかけていなかったら、わたしは椅子に当たって倒れていたと思います。このお蔭でわたくしが救われたのですが、伯爵さまにとってもこれが救いになりました。こんなことを伯爵夫人に申し上げてよいのかどうかわかりませんが、と申しますのも、もし伯爵さまがわたし

に椅子を投げつけていたら、ああ神よ、わたしはきっと伯爵さまの腹にナイフを突き立てていたでしょうから。女中は伯爵さまの腕を取って寝室へ連れてゆきましたが、そのさいわたくしに早く逃げるよう身振りで伝えてきました。ぐずぐずしている暇はありません。身の回りのものだけまとめるとすぐにその場を立ち去りました。後ろ髪をひかれる思いなどありません。そしてこうしてここに來たわけで、以上が事の顛末です」

母はベルナルドが語っているあいだ、見事に心の平静を保っていた。わたしと神父はベルナルドの率直な話しぶりにいくどか思わず笑ってしまったが、庶民の使う俗語がそこになかったら、これほど笑いを誘われなかったかもしれない。この忠実な召使いに、わが家で働いてみてはどうかとデニス神父は申し出た。しかし、せっかくの申し出だが、ここにはするべき仕事がないからとベルナルドも母も遠慮した。この忠実な召使いは、わたしたちとの別れぎわに泣いた。そして、いつかわたしたちの幸せな暮らしぶりをこの眼で見てみたい、その日を待つのが楽しみだと言っては自らを慰めた。

というわけで、わたしたちはサンタ・バルバラ伯爵の屋敷でなにが起こっているか知る術を失ってしまった。母はこのことにまったく無関心で、その類の話が話題にのぼらないよう気をつけているようだった。わたしは、母がこうして上辺だけでも心の平静を保とうとしていることが嬉しかったが、デニス神父は

人の心についてわたしよりもよく知っていて、母にこう言った。

「伯爵夫人、お屋敷でなにが起きているか、人を遣って探りを入れてみましょう。伯爵夫人のご不幸を増すようなことは起きていないと思いますが、それどころか、なにが起きていたとしても、それらがすべて奥方さまの静かな暮らしにとって有利になることは間違いないと存じます」

「わたしの静かな暮らしにとって有利なのね!…」と母はデニス神父の話に割って入った。

「間違いないかもしれませんが…サンタ・バルバラ伯爵が良い夫になるなど、とうてい望むべくもございません。神がなにか奇蹟でも起こしてわたしに宗旨替えを迫らないかぎり、わたしはそう確信しております。そして神が人間同士の交渉に直接割り込んでくださらないかぎり、ご主人の性格は、いつまでたっても、あなたを死に至らしめる死刑執行人の性格のままでしょう。お名前にかかわることをこんな言い草で語っておりますこと、どうかお許しください。まずはあの男が生まれ変われるよう神にお願いしなければなりません、われわれの祈りだけでその奇蹟を起こすことができないのなら、伯爵が不幸な奥方から離れているようお願いするしかありません。神の正義が復讐を遂げるよう求めながら奥方さまがみすみす死ぬことなどないように。小さな罪は、あの男を大きな罪から遠ざけます。女中との愛をもっと自由に味わえるようご主人がもしリスボンを発つなら、奥方さまはもっと清々しい空

気をもっと自由に呼吸なさることができる。昼も夜も暗い影につきままとわれることなどなくなるでしょう。あんな男であっても奥方さまから奪うことができないもの、それは至上の幸福です。この幸福については神に感謝せねばなりません。なぜなら、悪が地上の植物で善が天上の露であることは否定しようのない事実ですから。この露がかならずしも苦行の棘を忍耐の花に変えるわけではないにせよ、大いなる苦しみを埋め合わせてくれる小さな恩恵を、われわれは神に深く感謝しなければなりません。奥方さまは息子さんとお父上をお持ちです。この父という名をわたしにも頂戴したく存じます。そしてもし、わたしが不幸な友人をして愛しい娘と呼ぶことを奥方さまが軽蔑なさらないでしたら、白髪頭のこの男の導きに従っていただくのがよろしいかと。息子を愛する女性なら、心は愛で満たされると誇りをもって断言できます。わたしには、これ以上の幸福がこの世にあるとは思えません。母の愛というこの神聖なる愛、聖母マリアの慈愛に満ちたこの思い、これこそ天使の歓喜を類まれな地上の喜びに結びつける絆です。伯爵夫人、これ以上なを望めましょう。あなたには息子さんがいらつしやるではありませんか?」

「ええ、おります、おります」母はわたしをぎゅっと抱きしめてそう叫んだ。「息子がここに。でも、この子が誰かに盗られるんじゃないか、神さまがこの子の父親のもとに連れ帰ってしまうのではないか、そう思うと恐ろしくて…ああ、デニス神父!

わたしはあまりに不幸なものだから、こんなにつましい幸福さえ失うのが怖いのです。子どもたちの渴きを涙で癒す、この世で最も哀れなあの母親たちにも分け与えられる幸せの残り滓、それさえこのわたしにはもう権利がないように思えて。そうお思いになりませんかしら？ あの男はリスボンに持っている全権力を使ってでも、わたしの腕からこの子を奪いにやってくるんじゃないかしら。神父さま、この子はないにも悪くないのに、何年も前からこの子がわたしにとって悩みの種だったこと、ご存知？」

「存じております。とくと存じております……」と神父は答えた。「でも、リスボンはちっぽけな村ではありません。奥方さまはわが家にひっそりと隠れてお暮らしになればよい。ここにひとたび入れば、テージョ川に溺れ沈んだか墓石の下に眠ったのも同じ。子どもたちを預かるこの哀れな教師の家に奥方さまがおいでになることを、もし仮に知られそうになったとしても、リスボンから二千レグア⁽²⁾離れたところに息子さんと移動するために必要なものはならずべてこの家に揃っております。神の祝福は砂漠のアガルさえお見捨てになつていない。自らの名誉を救うために必要のない死の犠牲から逃れようとする者なら、どこへ行っても、正義への愛ゆえに苦しむ者に救いを与える神の見えざる手を発見するにちがいません。」

母は神父の足許にひざまずくと、その手を涙で濡らした。

第十一章

ディニス神父は養女の苦しみを和らげようと心を砕いていた。神父の話題といえはほぼきまつてわたしの将来のことだった。将来の見通しをこれほどまで見事に描ける人は、神父を描いて他にいない。その筆致の確かさたるや、なんと評すればよいのだろう！ その並々ならぬ幻を耳にして、母はまぎれもない現実だと言いつつ切っていた。母にとって、神父は預言者だったのである。

神父はじつさい預言者ではなかったが、それよりも、崇高な慰めを与えてくれる天使の天分を備えていた。わたしはいま暗い淵に落ち込み、虚妄の人生に見捨てられて死にかけているが、驚くべきヴィジョンを大胆な言葉で語り、わたしの耳を恍惚とさせてくれる男がもしいたなら、どこへでもついて行くだろう。精神はその男の宝の山から束の間の幻影しか引き出すことができないのだから。できるなら、そんな男にばったり出会って、男の美しい妄想を糧に何年か生きてみたい。そして、不幸な巡り合わせに疲れた自分が住むこの地球の外へと飛び出し、想像上の出来事だけが地上の比類なき善であることを納得してからこの身を終わりたい。

ディニス神父は最高の知性の持ち主だった。新しいものを生み出す想像力を天から恵まれていたからである。ある日の夕方、庭のブナの樹の木陰で、わたしと母は深い沈黙にとらわれていた。

デニス神父は水平線の陽の光の美しさに長いあいだ心を奪われている。火山の溶岩が水の表面に炎の舌を噴出させているような光景だった。

神父が忘我の境地でもの思いに耽っている姿に引きつけられて、川面に沈む夕日の壮麗さに神父が見ていた神秘を、わたしも理解しようとした。

いっぽう母は空も地面も見えていなかった。その眼は、外からうかがい知れぬ心の内側へと向けられていたのである。手を組み、その手のうえへ頭を傾けて、母はこっそり泣いていた。頬を伝って唇まで流れる涙にもし気づかなかつたら、母が不幸の重みに眼を上げられずに創造の厳かな光景を目撃できなかった理由を、わたしたちは知らずじまいだったと思う。

嘘ではない。平和にして穏やか、陽気にして朗らか、天使の庭のような馥郁たる香りを放つ美しい自然が自分の周囲に広がっているところを眼にすると、わたしには、不幸がいつそう耐えがたくなる。そして過去の絶望、現在の足かせ、未来の恐怖を、わたしの内面世界に感じ、苦しみの展望^{ペラヤ}のうちに感じてしまう。澄みわたった自然の動じない美しさのなかでは、自分が黒々と引かれた抹消線のように、幸福から立ち退きを命じられた追放者のように、周囲から孤立して感じられるからだろうか。わたしはそこに、自らの不幸を侮辱する陽気さを見てしまうのである！

わたしたちが空を眺めていたこのとき、母は涙をそっと流しな

がらきつとそんな思いを抱いていたのではなからうか。あの雄々しい魂はそのとき、鉄の男にしか耐えられない苦しみの淵に降りていながら、「ああ、神よ、あなたの子を憐れんでください！」と絶望の叫び声をあげる権利さえ与えられていなかった。なぜならこうした叫び声は、もし天に聞き届けられなければ、罰当たりな言葉の前触れとして、地獄に聞かれないわけにはゆかないからである。そして、見えない力によってこの世に放り込まれ、そのまま見捨てられてこの世で苦しむ被造物…その被造物が流す涙は、不毛な大地に落ちれば落ちるほど、神の摂理を示す痕跡を大地の表面から消し去ってゆくからである。 ……

というわけで、デニス神父が空を見ていた眼を下ろし、母の半ば隠れた顔に視線を注いだとき、わたしたちは前述のような状況にあった。神父はこう言った。

「このひとときは思い出を掻き立てますな。思い出は不幸な人々にとって、いちばんの生きがいです」

「ほんとうにそうですわ！」母は頭を上げると、ほっと息つくように言った。

「そういえば以前こんなことがありました」組んだ手を胸に置いた神父は続けて言った。「十五年も前のことでしたでしょうか…やはりこんな晴朗な夏の午後でした…青い空と郷愁を誘う黄

昏を今でも覚えています。わたしたちがいま、物思いに耽ったり、なにかを感じたり、苦しみを味わったりしている、ちょうどこんな黄昏時でした。

あその階段から、見知らぬ男性が降りてくるのが見えまして：ちらっと見ただけで『上流社会』の方だとわかり、こちらから出向いて挨拶しました。先方は、わたしが庭にひとりであるのを見た、ここで迎えてもらえてよかった、どうしても秘密にしてみらわないと困ることで相談があるからだ、とおっしゃるのです。いま伯爵夫人がおかけになっているベンチに男を座らせ、わたしも同じベンチに腰掛けました。

その男の外貌を描きたいという気持ちが抑えきれません。記憶に間違いがなければこんな方でした。

背は高くなく、驚くほどやせておりました。大きく黒い眼をしていて、そこには落ち着きのない光が煌めいています。精神的な動揺の大きいことがわかりました。落ち着きのない印象を受けたのは、眼からだけではありません。容貌全体が語る印象と比べると、言葉が語ることなどむしろ少ないくらいです。対比の妙ともいうのでしょうか、男は冷徹でありながら、どこことなく心ここにあらずといったような、それでいてしごく悲しげな表情をしていました。青白く痩せこけた顔は、もし眼が生命の煌めきを迸らせていかなかったなら、まるで麻痺した骸骨といったところですよ。

厳格な喪に服しているような黒服を着ていましたが、その着こ

なしにはどこかだらしないところがあって、ネクタイやシャツばかりでなく、カフスボタンまでちぐはぐで乱れています。その原因が趣味の悪さではなく、なげやりな態度にあることにはすぐ気がつきました。

いま申し上げたささいな細部は忘れられません。というのも、ある種の人たち、つまり社交界でなにがなんでも目立ちたいという人たちがどんな着こなしをするものか、わたしは興味をもって観察してきたからです。

陳腐な男、率直に申せば思慮のない男はまず、仕立て屋がせっかく自分に合わせて裁ってくれた襟のラインをくずしてジャケットを着ようとします。シャツのカラーからまっすぐ首が伸び、蝶ネクタイの二つの結び目のあいだで垂直バランスをうまく取れば取れるほど高級な気分になるという精神構造は、じつに軽薄です」

母はおそらくつきあいからだろう、軽く笑ったが、わたしは先生の軽妙な批評をどう評価してよいものかわからなかった。神父は先を続けた。

「したがって、言葉を発するまえに訪問客がどんな男だから言ってみると言われたら、後から確実に判明できることを、服で修道士を判断するわたしの実践方法で予言者のように先に言い当てることができます」

最初の挨拶が済むと、紳士は正体を明かしました。伯爵夫人は

すでにだれがお分かりのことでしょう。ここにいる少年がその名を知る必要はありません。浮世離れた伝説を聞いているようなもので、主人公の名前よりも筋書の方に興味がそそられるでしょうから」

母の注意力が増したように見えたのは、神父が続けてこう言ったときだった。

「名前を言い終わると…名前はここでわざわざ言うには及ばないでしょうが…その紳士はしばらく黙っておりました。髪の毛に指を差し込んで、ぞんざいに耳の後ろに掻き上げています。水を一杯御所望になると、一服する許しを請い、わたしに会いにやってきた理由をあとで説明申し上げるから、そのまゝにまづは数分休ませて欲しいとおっしゃいました。『さぞや奇妙な男だ』とお思いでしょう』とおっしゃるので、『いまのところひとりの男性であるとは思えません』と答えると、先方は『たいへん不幸そうな男性にね』と言いつきました。そして、水の入ったグラスを手にとると、あとはそのままにしておいてくれと召使に言いました。

数分が過ぎ、紳士は来訪の理由を説明なさいましたが、その声音はどこか危うげな、しかし、人の心に沁み込む心地よい悲しさを帯びていました。

『お話しするまゝに、あらかじめお願いいたします。よもやわたし泣くようなことがございましたら、そのときはどうかご同

情をいただけますよう。わたしは泣くことができませんし…この先もけつして泣けないと思いますが。もし少なくとも、わたしとわたしの血でその不名誉を贖うことのできない不幸な幼い娘の境遇をどうかお伝えすることができましたら…そのさいには、涙では得られなかった貴殿のご慈悲を頂戴できるのではないかと』

『どうかご遠慮なくお話しく下さい。なんなりと何う所存であります。われわれの友情が長年培われてきたものだとお考えになって。親しい兄弟のところへ多大な犠牲を乞いにいらしたとでもお思いいただければ』この言葉を聞いて紳士はどうやら急に元氣を出したようでした。顔の表情には揺るぎない信頼と親しさが表れています。

『貴殿に仲介の労を執っていただけの方をわたしは探しませんでした』と紳士はおっしゃいました。『苦しみに悩んでいるからといって、その苦しみが恥ずかしいものでないなら、克服できない困難などございません。こうしてひとりやってまいりましたが、それでよかったと思っております。貴殿の善良な表情には寛大さがうかがえましたから。

わたしは次男です。したがって貧乏です。貧しい次男坊が精神的に成長し強固な意志をもつようになれば抑えることができるになるいくつかの性向を、人間の気まぐれがつくった法律のためにわたしは幼いころから心のうちで奪われておりました。次男ゆえに幸運にめぐまれなかった貧乏人の息子は、法律上貧乏なわけ

すから、その欠陥を補うために法律は、正式の結婚から生まれた私生児ともいふべき次男の境遇に注意を払うよう努めるべきだと思います。いかなる種類であれ貴族の称号をもつ者の次男は、もし長子以降生まれた子どもたちを養うに足る財産がないばあい、産婆の手によって孤児の身分に委ねられると規定すればよい。そんなことは法律にとって造作もないことです。子どもは自らの生まれも知らず、卑しい身分のまま育ちます。豚を飼ったり、長靴を直したり、居間の床に磨きをかけたりする年齢に達すると、名高い貴族の次男坊が靴職人や、どこぞの家の下男や、町の浮浪少年になっているかもしれません。ええ、本当に。そうなれば法律は長男にとって寛大なものになるでしょうが、次男坊にとってもまた寛大なものになるはずですよ。

自分にしかわけのわからないこんな回りくどい話ばかりで申し訳ありません。と申しますのも、〈非長子〉として生まれてきたことを正面切って指摘されるようになって以来、〈長子〉の心を刺激してやまない高貴さに憧れることなどできないと自分に言い聞かせようとするたびに、この子どもっぽい省察を避けて通るわけにはいかないからです。しかし、ディニス神父、そんなことを言われたときにはもはや手遅れでした。

わたしは十四歳で学校コレジを出ました。それから八年間、奇妙な恋をしました。といっても、社交界をさわがせるような類のものはありません。ただ、一日一日が一年分の寿命を吸い取ってしま

うような恋……これが少年期の恋、思春期の恋でした。そして老人のようになった今にいたるまで続いています……ご覧のとおり、わたしは、墓にたどり着くまえに、その近くでくたばってしまったような男です。蛆虫は、死体のあいだになら間違いない見出し出せる糧と休息を、生者が呼吸する戸外で見つけられないまま踏み潰されてしまうことがあります、そんな蛆虫によく似ています。

十四の歳に、いわゆる宿命の女に出会ってしまったのです。立ち向かう男に欠けるところなき幸福を与えるかと思えば、これ以上ない不幸へと突き落とす女。

わたしと同じ第二子で、わたしと同じ不遇を宿命づけられた若い娘でした。

この天使への愛のためどのように生きたかについては、どうやってお話したらよいものやらわかりません。最初は穏やかな夢のようで、感覚の惑乱を伴わない甘美な心の陶醉でした。わたしたちにとって幸福がどうあるべきか、考える必要もなかった。ところがその後、わたしたちの関係はぎこちなくなり、相手が前にいると大した理由もなく赤くなつて眼を伏せたり、ふたり同時に空を見上げたりするようになりました。生涯にわたつてお互いを不幸にする契約に捺印を押すような息詰まる表現やぞつとするような言葉を、ふたり同時に口走るための勇気を天に乞うているかのようにでした。それは結局、心と頭、無垢と打算、神聖な愛情と悪魔のような社会的体面とのあいだの激しい葛藤でした。

デイニス神父、以上がわが悲劇の筋書です。語りえぬことについてには黙っておりましょう。心中のひそかな苦しみについてはどう語ればよいのかわかりませんし、ご理解いただける自信もございませんから。貴殿の穏やかなお顔を拝しておりますと、口をつけたことのない苦杯に宗教の蜜を注ぐ司祭さまにとって、自分がいかに意味不明な言葉を発する異人であるか、納得しないわけにはまいりません』

『いや、貴殿のことは理解しております』

わたしが言った言葉はそれだけです。男は続けました。

『六年後、この愛は赤貧によって息の根を止められました…赤貧ですよ、デイニス神父…なんと卑しく品のない言葉ではありませんか』

『卑しくも下品でもありません…ただいささか言い過ぎというだけで…こう言ったらよろしいでしょうか。外的な事情によってやむなく…』

『いや神父さま、最も嘘偽りのない言葉は〈赤貧〉です。わたしの愛した女性はモントゼロス侯爵のご息女でした。そしてわたしはアルヴァンソニス伯爵の息子です。ポルトガルで一二を争う名家の子息がふたり、揃いもそろって赤貧だなんて、お認めになられますか？ でもこれが現実なのです。』

六年後、わたしはこの女性のまえにひざまずいてこう申しました。この世には神に聖別された場所、社会が切り離すことのでき

ない魂に許された場所がある。わたしと結婚してくれ。ふたりの涙で水をやった花をわたしに摘ませて欲しい。ひとりでいたらどうやって早死にを免れたらよいのかわからない。早死にしないための縁を人生のなかに追求めさせてはくれないか、と。

その女は喜びの涙を流してわたしの申し出を受け入れてくれました。心も体もあなたのもの、生きるも死ぬも一緒だと、すでに神にお誓い申し上げました。女はそう言ってくれました。同じ第二子同士の色恋沙汰はご法度だところり耳打ちする社会の抑圧に抗って、そう言ってくれたのです。その女からこんな言葉を耳にしたのはそのときが初めてでした。でも、自分を責めるその社会にも敬意を払うことで、自分の味方になってほしいとも言いました。

わたしは相手の言っている意味がわかりました。

そこで翌日、わたしはモントゼロス侯爵に、数分でいいから話を聞いてくれないかと申し入れました。侯爵の返事はいまだに脳裏に焼き付いています。こんな返事でした。〈娘との結婚を申し込まれるやっかいを避けるために、結婚話にお貸しする耳のないことをあらかじめはっきり申し上げておきます。娘は、同じくらい高貴な男性にしかやれない。その点、貴殿は合格です。ただ、それに加えて、育ったときと同じ贅沢な思いがでずに娘が寂しい思いをするような、そんな相手には娘をやれません。娘は貧乏ですが、貴殿も貧しい。長子にとって恥ずかしい境遇を、次

男次女にも用意してやる事ができない点で、わたしもアルヴァソンス伯爵も一緒です。〜

これに対してわたしはなにかもご言ったのでしよう。侯爵の氣に障るようなことだったのかもしれない。いずれにせよ、侯爵がわたしに背を向けてこう言ったことだけははっきりしています。〈出入り厳禁の命令は、出す方にも不愉快だが、受ける方にもさぞや不愉快だろう。それを避けるためにも、これから先、なるべくうちには訪ねないでいただきたい〉というものでした。

自分が卑しい人間に思えました。われとわが身が恥ずかしくて仕方なかった。ひとりの女性の父親に面と向かって話しかけ、その人から価値ある人間だと思われたがっていることが、なにか大それたことではないか。そう思いはじめていました：そのうえ、女性の父親は、わたしが貧しい男で、けちな平民同然の卑しい輩だと言ったのです。

貧しい人間において、自尊心は恐るべき情熱です。金持ちなら、豪華さを誇示し敵の眼を眩ませられれば自尊は吹き消せる。ところが貧乏人となると、自尊心の情熱はひそかな復讐心に火をつけ、身をじわじわ炙るのです。

たしかにあれは卑しい復讐心でした。平民の復讐心とは申しません。貴族が復讐をするのは気高い精神からであって、平民のように腐敗墮落からではありません。平民は、自分を辱めた父親に恥をかかせ、顔が真っ赤になるところを見ることで卑しい本能を

満足させるわけですから。

自尊心と屈辱の闘いは長く続きませんでした。自尊心が勝利を収めました。自尊心とは、わたしのばあい、たったひとつの財産である誠実さと美徳にたいする誇りでした。

わたしはずいぶん泣きましたよ、ディニス神父。自分自身とその女性のために。何時間経っても、その日の最後の鐘が聞こえてきても、かわいそうなその女を嘘の希望で慰めることはできませんでした。男というものは、絶望に潰されきつていない女性に、あれこれと慰めの言葉をでっちあげては与えるものです。

わたしは赤子のころから病弱でした。学校時代、病気で死にそうになったことは一度や二度にとどまりません。他人にはわたしがいつ死ぬか言えないでしょうが、このわたしには言えます。死の進行が分単位でわかるからです。悲しみのために十年後、二十年後に死ぬというのなら、たしかに小説まがいの空想かもしれませんが、わたしが自分の病気にたいしてこういう診断しか下せないことはまぎれもない事実なのです。わたしは子どものころよく急激に消耗して沈鬱になりましたが、思えばこれは死の予兆で、今ではその死がわたしを殺そうとしているのを感じることができるよう。しかも、わたしまで届くたったひとつの手から繰り出された打撃を受けて、この消耗が加速しています。この天使の父親が、恐ろしい亡霊となってわたしにつきまとい、娘の愛の照り返しを以てしても恐怖心を振り払うことができません。わたしには悪を

なすだけの魂もなければ、わたしのために絶望の苦い涙をあれほど流してくれる人の血を要求するような心もないのです…

希望といえは…ひとつだけでもっていました。でもそれもまた一時のぎのはつたりにすぎなかった…わたしはアメリカのことを考えていたのです。アメリカに行けば、金^{きん}がふんだんにあります。ヨーロッパだったらとんでもない身分も容易に手に入れられる。人身売買もやっていて、ポルトガルに帰ってきたら立派な紳士になれます。貧しさが未来永劫消えることなく意識に刻みつけられていると考えていたわたしは、父の許を去ろうと思いました。わたしには卑しく粗野にしか思えない仕事、手を染めたくない仕事などなかったからです。それに、財産のためなら名誉に疼きないしささかも感じませんでした。長子に遺産を相続する法律がわたしから盗んだ財産を社会は補償する必要がある。現行法に対立する法律がない以上、不名誉という多少なりとも抜け目のない武器で、不当に奪われたわたしの財産を取り返しに行くんだ。そう考えていたのです。

高貴な情熱に矛盾するこうした考えが、いかに精神的な腐敗を引き起こしていたかわかりました。野望という潰瘍に蝕まれている自分に気がついたので。こうした墮落の原因がどこにあるのかわかりませんでした。そのために起こった数々の背徳行為は見過ごしてやることにしました。どんなにきちんとした精神でも、ほんのわずかなことがきっかけで退廃することを知ったので

す。金^{きん}のことばかり考えていたわたしの計画の暗い闇を引き裂いて、あの無垢な娘の光り輝くイメージが浮かび上がってきました。わたしは、頼みの綱であるあの野望の実現に向けて七転八倒していたわけですが、そんなことはもうおやめになってという娘の声が、平安の天使の声のように聞こえてきました。以前のわたしならなものも持まず、金持ちの贅沢にも心を動かされていなかったことを思い出し、魂が失った美徳の豊かさがいかほどだったか思い知った次第です。

出発のときがやってきました。モントゼロス侯爵の家を体よく追いつかれてから三か月後のことです。

旅の準備に用心は要りませんでした。そもそも計画を知られずに準備することなどできなかったからです。

不幸の道連れがどうしているか、出発の前日まで消息を知りませんでしたし、尋ねもしませんでした。ほとんどの時間を、リスボンから十里ほど離れた兄の農場で過ごしておりましたから。この隠れ家を訪れたとき、アンジェラと出会ったこの家で死にたいと痛切に思ったものです。この不幸な愛が花のように陽を浴びて美しく咲いたその農場で死にたいと。ふたりで一緒に摘んだその花は、愛についてわたしたちにもまして雄弁に語ってくれました。しかも、幼いころから、農場の礼拝堂の先祖の墓前にひざまづいて祈りをささげるたびに、わたしはいつももある予感に襲われていたのです。かなり早くに、まだ子どものように若々しいわたし

の顔が、わたしよりも幸せにこの世を生きた者たちの骨に並んで置かれることになるのではないか。そういう予感です。この予感に襲われたときの震えはいまも忘れられません。病気で死にそうになったときには、あの農場に運んで行って欲しいと頼みましたが、農場に運ばれると病気が治ってしまうこともたびたびで、なのであのまま死なせてくれなかったのか、ほんとうに悔しい思いをしたものです。

モントゼロス侯爵の娘に手紙を書いたのはその農場です。わたしの意図を知らない兄が手紙を持って行ってくれました。書いたのはほんのわずかなことだけです。がっかりしないでほしい。希望を失わないでくれ。同情と忠誠を忘れないようにお願いする。わたしの出発は秘密にし、寛大な気持ちで受け止めてくれと。

兄は返事を携えてきてくれましたが、その返事もまたとても短いものでした。

こうありました。ご出発は仕方ありません。ただ、代わりにひとつ条件がございます。ご出発と時を同じくして、わたしが自らの命を絶つことをお許しください。

この書付けを読んだわたしは気が動揺し、兄の腕のなかに頼れてしまいました。兄は書付けの内容を教えて欲しいと言いました。

兄に秘密は打ち明けませんでした。侯爵の娘には会ったか尋ねたところ、会ったと言います。そのときの状況からすると、あの女にはもう二度と会えないのではないか、あんな状態ではそんな

に長らく生きられないだろう、と言うのです。

わたしの野望は一瞬にして潰え去りました。高貴な心の痛みが、身勝手な頭の計算に打ち勝ったのです。わたしはすぐに、自分の立てた計画が犯罪であることに気づきました。そして、不幸な女の三か月にわたる沈黙が父親の圧政によることも。心が痛みました。女の状況を自分自身の状況に引き比べ恥ずかしくなりました。一方は父親に抑え付けられ、寂しい思いをしながら沈黙を強いられ、死のうとまで思っているのに、このわたしといたら、そんな女を捨てて故国を発とうとしている。金の獲得で不幸な恋の憂さを晴らすと身勝手なことを考えているのですから。ひざまづいて許しを請わなければならない。故国を捨てようとした裏には、その後愛の希望を実現したいという尊い動機があったことを、納得ゆくまで説明したい。そう思いました。説明すれば理由を納得してもらえらるだろうか？

金にたいする愛情から心を荒廃させ、その後たとえその金を提供できたとしても、野心的な取引の潰瘍に侵されてしまう男、そんな男が繰り出す新手の甘言と取られないだろうか？ もし仮に理由がわかってもらえたとしても、わざわざ探しに出かけた金を結局恥知らずな競売にかけるのが落ちだとしたら、卑しい行為だと相手から思われないだろうか？

心の中で問いかけていたこうした問いを、だれでもいい、地上の美德は死滅したと毎日のように嘆いている友人にぶつけてみた

ところで、せいぜい笑われるのが落ちでしょう。へあんたがすでに座っている王座をどんなやり方で金ぴかにしたって、それが女にとってなんだっていうんだ——人類なんぞたんなる感覚の泥沼にすぎない。やつきなつてそう考えようとしている卑しい哲学者ならこう言うかもしれません。それは違ふとわたしは思います。金だけが保証してくれる地位を得ることで女にふさわしい男になろうと離れて行く瞬間に、その男の出發を認め、自殺という思い切った条件を自らに課そうとしている女にとってはとりわけ。ところが、その女は王座ではなく、墓を望んでいるのです』

『で、その女性のはたしてこの条件を実行に移すことができるのでしょうか？』とわたしは訊きました。

『よくわかりません。貴殿にもよくわかりのことと存じますが、このわたしにはなんとも』

『その娘さんはカトリックの教育を受けていらつしやいますか？』

『受けていると思います。母親が人生の長い殉難の終わりにいたるまで、十字架の下にひざまづいていらつしやいましたから。あの母親が愛娘を腕に抱いていなかったなど考えられません。そんなことをお尋ねになるのは、ひょっとしてカトリックと自殺が両立できないからでしょうか？』

『そのとおりです』

『わたしも、自殺というこれ以上ない不幸とカトリックの諦観

が両立できるとは思えません。希望とはこの世をお創りになった神が人間の心の中に植え、そこから自然に芽生えてきたものですから、その希望を信じないと心が痛みます。徳へ向かうとする性向は阻まれるものです。精神はいかに無垢な素質をもつていても、社会の悪によって罰せられ、窒息させられてしまう。犯罪者にならないまま墮落することだってあるのです。気高く自由なあこがれをこうして踏みにじられ拒まれた精神が、神の高みをめざし、苦痛と折り合って仲良くやっていければそれでよい。神父さまはそうお考えですか？』

『そうは思いません。ただ、不幸な方々には、人のあいだに見つけられない慰めを神のうちに見出すよう勧めております』

『デニス神父、この問題にはあまり深入りしないようにいたします。われわれの話題から離れすぎてしまいますから。申し訳ありませんが、宗教談義は遠慮させていただきます。このわたしが不幸だからです。もし幸せだったら、この話題から逃げることもないでしょうし……この場で熱心な信徒になっているはずだと思えます。感謝の念ほど美しいものはありません。それに、わたしの幸福をお守りくださる至高の精神に認められたいと思えますから。したがって、悪がごとく地上のものであり、神が不完全でありえないことを確信しているわたしとしては、人がわたしに成す悪を慰めてほしいと神にお願いすることなどできません……そんな祈りは、神に対する冒瀆になるでしょうか……』

『お苦しみは認めたいと存じます』と、わたしは答えました。
『ただ、ご意見を認めるわけにはまいりません。精神がもつと落ち着きを取り戻してからでなければ』

紳士はわたしの言ったことをしばらく反芻してから、話を続けた。

『わたしはその場でアンジェラに返事を書き、この女性との恋については打ち明け話を無理強いしないでほしいと頼んでから兄に手紙を託しました。罪なくして不幸になったこの女性には、あなたの意思に反することをするつもりはないと書きました。わたしの行動と意思をどうか導いてほしい、わたしの運命を定め、その苦悩を和らげ、一緒に苦しむという甘美なつとめを課してくれないか、と。』

この言葉は、母親の涙でもはや蘇らせることのできない花に息吹を与える天の露でした。アンジェラは父親のエゴイズムのはけ口になっていました。モンテゼロス侯爵は娘が苦しんでいることを知っています。ところが、その苦しみをおもしろがって観察していたのです。どうせいつときの熱病からくる苦しみにすぎない。あの不都合な恋から生じた発作のようなもので、いずれ救ってやらねばなるまい、と考えて。

兄は、幼い手がふたりの心のあいだに結んだ穢れない絆を無理矢理引きちぎるのは思慮のない行為だと、わたしの許可も得ぬままに侯爵に忠言してしまいました。自分の弟も侯爵の娘と同じよ

うな状態にあるのだと縷々説明し、最後には、精神に分別がもどってくるまで、いくどか会うことを許してやつてくれないかとまで懇願したのです。

侯爵は慎重をもとめる兄の意見を悪くとり、自尊心を傷つけられて腹を立てました。兄に面と向かって、だれの名誉にもならない役目を引き受けて、アルヴァソニス伯爵はじつに哀れな立ち回りを演じていると言い放った。

とはいえ、わたしはその後アンジェラの手紙を受け取りました。第三者を介して、手紙を受け取れる確実な手段を提供してくれたのも兄でした。兄によれば、侯爵はこれいじょう仕返しをするつもりはなさそうだということでした。

希望をもてるようになって生きかえったアンジェラは、身を以て父親の推定が間違っていないことを立証しました。侯爵は、がっかりした娘が自分の問題を忘れ、そのことで、侯爵の傲慢な計算を満足させるだろうと推測していたからです。

実際、大はしやぎをしているアンジェラを外から見ているかぎり、そういう推測しかできませんでした。しかし、ひとたび完全に自由になると、この不幸な子どもは、情熱が犠牲を強いてきたときに乗り越えなければならぬ危険を頭のなかで緻密に計算していたのです。もつとも犠牲を犠牲とは考えていませんでしたが、犠牲という言葉は、それを取る女性によってまったく意味が違ってきます。愛を、魂よりも肉体にはるかに高い価値を与えるべし

という但し書きが明記された契約書と考える女性もいれば、愛情における精神主義に集中し、魂の飛翔は、徹頭徹尾物質世界について書かれた精神とはなんの関係もない礼節の掟によって抑制されなければならないことがわからない女性もいる。後者の女性は無垢です。前者の女性は失うものがないものがないけれど、毎日のように新たな犠牲を創りだすわけです。

こちらから頼んだわけでもないのに、アンジェラは家に来てよいと伝えてきました。やっと二人だけで会うことができ、四か月のあいだ溜めていた涙を出し切ったその日から、わたしはアンジェラを妹と呼ぶことにしました。裕福になるためにかつて立てた計画を聞いてもらい、わたしたちの愛と契約したいと思う第三者が出てくるだろうから、金で購う素敵な将来が実現できるはずだと夢のような話を語ってきかせました。しかし、どんなに幸せで色づけして見せても、アンジェラはそのような考えを認めてくれません。愛だけしか糧のない砂漠でも、わたしたちは心地よく暮らすことができると言うのです。アンジェラはまだ子どもの国を空高く飛んでいて、わたしにはもはやついてゆけませんでした。どんなに精妙な心の理想を実現するためにも、お金という大きな代価を払わなくてはならないという考えは、だれがなんと言おうと、わたしには容易に取り下げることのできない現実になっていったのです。

〈空想の〉貴族階級が余りものとしてわたしに残してくれた〈現

実の〉貴族階級の地位に、いつかこのポルトガルの地で到達できるのだと考えると、それだけでアンジェラと一緒にいる幸せが倍加するのです。商店主なら、貴族の家に出入りし、ひとりめの娘にもふたりめの娘にも婚資を与え、豪華な屋敷を建て、気まぐれから明日にでも甲冑に家紋を刻ませたりできるわけですが、その商店主の息子よりも、アルヴァソニス伯爵の次男坊は価値が低かったわけですから。

四か月のあいだ途切れることなく、ときには夜にもアンジェラを訪ねましたが、疑われるようなことはありませんでした。さんざん苦しんだあとで、ああして感じる静かで言いようのない幸せは、兄弟姉妹の無邪気さがわたしたちの穢れない逢引きを守ってくれるかぎり乱されることはありません。

理想的な情熱をもったふたつの魂が地上で望んでも得ることのできない天上の穏やかな欲望が発するおずおずとした眩きよりも声高に激しい情念が語り始めたとき、無垢の天使はわれわれを見捨てました。

無垢の天使がわれわれを見捨てたとき、わたしは知りました。悪は、たとえ後からであつても、必ず罰せられるということ。

ある晩、夜二時の鐘が鳴るころ、アンジェラの家庭の扉に隠れて、わたしはいつものように合図を待っていました。その合図があれば安心して上に昇ってゆけるのです。

ところが合図がありません。なにか起こったに違いないと考え、

数分間待ちました。アンジェラがいつ姿を見せるだろうと、眼は一点に釘付です。

するとそのとき、塀の反対側にだれかの頭がとちらりと見えしました。ぞつとしました。頭の見えた方には半身の人影がふたつあります。隠れようとしたが、遅すぎました。火器の爆発音のようなものが聞こえ、まばゆい閃光に眼が眩みました。火薬の濛々たる煙のために、感覚も思考力も混乱の極みです。

二か所に最初軽い痛みがあり、それがだんだんとひどくなってきました。右腕と背中です。負傷したことがわかりました。無意識に何歩か足を進めると、あたりを巡回していた警官に囲まれました。こんなひと気のない路地で鉄砲の音が聞こえたが、いったいなんだと訊くのです。

言いよんどんでいると、不審人物と疑われて捕まってしまいました。

派出所に連行され、尋問を受けましたが、そのときはもう返事ができない状態でした。大量の失血をして、額には冷たい汗でびっしょりかき、やがて完全に意識を失って。

意識を失っていたのはほんのしばらくのあいだです。警察署長は神経の濃やかな人で、しかも、たまたま、我が家をよく訪ねる旅団長の息子さんでした。わたしは変事の説明をせずに済みました。署長さんは、わたしがやつかしい状況にあることを悟って、治療のため薬局に連れていってくれました。

弾丸を四発撃ちこまれた腕の傷は比較的軽傷で済みましたが、背中を貫通した弾丸が肺に損傷を与えており、それが致命傷になっていました。

帰宅するとまず、父親と兄弟たちのまえにひざまづいて、この出来事については固く秘して絶対に口外しないでほしいと頼まずにはいられませんでした。ただし、負傷した場所や理由がわかるような言葉はいつさい口にしませんでした。

最初のころ、わたしの命を保証する医者はいませんでした。傷は致命傷なのか思い切って訊いても、家族から得られる返事はただただ涙だけでした。

この出来事の秘密はわたしと一緒に消えてゆくはずでした。わたしは父の優しい問いかけにもほだされることなく、兄にさえ真実を否認しました。もつとも兄は、真実を推定するのに大した苦労はいらなかったと思いますが。医者にとなく言われていたので、父も兄もしつこく聞き出そうとはしませんでしたし、家人がわたしに質問することも許しませんでした。

わたしはこの世で最もおそろしい苦悶に喘いでいました。しかしそれは肉体の苦痛でもなければ死にたいする恐怖でもありません。アンジェラの運命を思うと、この身が八つ裂きにされる思いだったのです。アンジェラという名前を唇にのぼらせないようにするのがつらかった。苦痛の叫びのように、一滴の水を求める瀕死の人の懇願のように、陥った深淵から助け出してくれる人手が

ないときに不幸な者が神に助けを求めるように、その名前を叫ばずにはいられなかったのです。

わたしはもうそれ以上我慢できませんでした。兄を枕元に呼んで、瀕死の人間を憐れんでくれと頼み、発砲騒ぎの顛末を話しました。兄の表情に怒りが表れると、まだ間に合うなら、あの不幸な女を助けたいから、無茶はしないでほしいと言って、その怒りの矛先を収めるように頼みました。兄にすっかり胸襟を開き、むせび泣きながら、いかに激しい情熱があったとしても許されることのない自らの罪を告白したのです：

兄は寛大な気持ちでわたしの話に耳を傾け、兄弟の真摯な愛が染みわたった言葉で勇気づけてくれました。おまえのために何ができるか言ってくれと訊かれたので、アンジェラがいまどうなっているのか教えて欲しい、もし見捨てられているようだったら保護してくれないか、そう答えました。

打ち明け話によると、兄はわたしが負傷した二日後にはもう怪しいと睨んで、モントゼロス侯爵のところへ行ったそうです。侯爵の部屋にはすんなりと入れてくれたが、侯爵は仕事机に寄りかかっていて、その机の上にはまるで用心を誇示するかのようには二挺のピストルが置いてあったと言います。兄が入ったとたんに侯爵の顔が蒼ざめ、応対は冷たかったらしい。兄が発砲事件のことを話しても、たいして心を動かされたようすもなければ、事件の詳細について訊こうとしなかったようです。こうしたことを考

え合わせ、兄はわたしが負傷したのは侯爵の家だったと結論しました。

〈で、アンジェラは？〉とわたしは訊きました。

〈アンジェラは見なかったし、おやじに消息を尋ねることもしなかった。あそこにはほんの数分しかいなかったからな。ただ、家を出るときに門番に御嬢さんはお出かけしたかと訊くと、二日前に出かけたが、あれから帰ってこない、この先もたぶん帰ってこないだろうという返事だった。もっと詳しいことを知っていたが、結局なんにもわからずじまいだったよ。発砲事件のことを話題にして、このあたりで噂を聞いたことがないか尋ねてみたが、初耳だということだった〉

それでもアンジェラが家にいないことだけはわかり、わたしは熱で灼かれそうになりました。

兄との会話は、アルヴァソンス伯爵宛ての一通の手紙で打ち切られました。印章はモントゼロス侯爵の紋章です。父はそのとき家におりませんでした。伯爵の爵位をもっている兄は、手紙が自分宛ではなく父宛であることに気づきました。

〈でも、この手紙はたぶん例の件についてだな…〉と兄は言いました。

〈父さんに見られるとまずい…〉わたしは震えながらそう言い足しました。

〈とって、ここで開けてしまつては礼を失するし…〉

「それはばくも重々承知している。でも、これまで一度だって礼を失したことはなかったし、これが最初で最後だ。侯爵が手紙の内容を訊ききたらばくから父さんに話しておくから…」

そう言つて、狂つたように手紙に手を伸ばし封を開け、読もうとしました。ところが読めません。急に眼に雲がかかつてしまったのです。まるで、わたしと生命のあいだにヴェールがかかったようでした。

兄が手紙を読んできました…これがその手紙です…神父さま、少々お耳を拝借いたしますがご辛抱を。

伯爵様。時は移り、名譽を重んじる時代とともに騎士の仇討ちの習慣も消えました。祖父の時代にもし祖父に娘があつて、その娘との意に染まない結婚を申し込みにご尊父がやってきたとしたら、祖父は家の閥をまたがせないよう命じたことでしょう。それでも懲りずに厚かましい計画を捨てないなら、ご尊父は、モンテゼロス侯爵の家臣が戦場で試みる剣とあいまみゆることになったはずです。とはいえ、時は移りました。今日日、不貞をこうむった側が家臣に打ち明けて懲罰を依頼することを望まぬときには、墮落した不貞の貴族には弾丸を一発お見舞いたします。それでも腰抜け男が懲りないようなら、弾丸をお見舞いした道具をさらにまた使う必要がある。ご子息に向つて何発か発砲させた理由は以上です。追剥が庭の塀をよじ登つてきたら厄介払いせねばならな

い。それとかわりません。

ご子息はたまたまわが狙撃兵の腕前よりまさつておりました。もしご子息が亡くなつたとしても、こちらとしては襲撃を闇に葬るつもりなど毛頭なかったこと、くれぐれもお忘れなく。わたしとしては、ご子息の亡骸を担架で父親の家まで運ぶつもりでおりました。そしてその亡骸の手には、ご子息の死後の物語を発見なさつたはずです。死せる唇が語ることでできない物語を。

わたしには娘がひとりおります。わたしの同意なくしては、なんぴとたりともこの子を所有する権利をもてません。ところがご子息は、父親の権限なぞ愛人のあつかましさの前では物の数ではないことを立証しようとしてみせ、わたしの顔に唾を吐きかけたのです。しかしご子息は思い違いをなさつた。もしもこの先ご子息が生きながらえるようなことがあるなら、わたしの授けた教訓から利益を引き出すことができると思います。

ご子息の恋によつて汚される恐れもありましたが、娘がまったく純潔であることもわたしは確信しております。もしそうでなかったら、誘惑者が病の床に逃げ込むこともなかったでしょうし、娘が恥辱を受けたあとで生き延びることもなかったと思います。恥辱は自らの血をもつて雪ぐ。これがわたしの仕来りです。もし身体が穢れていたなら、娘は今ごろ屍衣に包まれていたはずですよ。この手紙の最初の目的はひとまず達成することができました。まだ他にも目的があることは言うまでもありません。ただ、痛

ましい結末を避けるためには、物事ははっきり申し上げておいた方がよい。今後、ご一族のなんびともわが家の中庭グレイスの煉瓦を踏むことをお許しになりませぬよう。

モントゼロス侯爵

この侮辱的な手紙を読んで聞かせてもらったとき、わたしはほとんど理解できませんでした。兄は書かれた言葉の半分を飛ばして読んだために、この無礼な文のいくばくかは意味が変わってしまつて、そのためにこれを書いた人間の恥辱と矛盾することになっていたのです。ともかくにも、こんな侮辱は父の眼に触れぬようにしてほしい、なんでもいいから適当な理由をでっちあげて、父が侯爵の家に行かないようにしてくれとわたしは兄に頼みました。

しかしこうした用心は兎戯に等しいものでした。モントゼロス侯爵は自分のしたことを自慢し、自ら吹聴してまわっていたのです。自分に最も都合の良い場面だけを大げさに飾り立て、娘の恋は間近で観察していた、夜中の二時に庭でふたりが〈初めて〉逢引きしたことに気づいたときには、貴族の礼法に則って射撃で迎え撃とうとしたのはこのわたしだ、などと話していました。そして皮肉っぱい大笑いで話を締めくくると、わが一族をからかいにやってきた友人たちからお祝いの言葉を頂戴するという仕儀です。したがって、家に帰ってきたとき、父は侯爵一族の説明によつ

て事件にかんするすべてを知っていました。

ふたりだけになったとき、この誠実な老人はきわめて慎重な態度で事件についてふれ、この殺人未遂にたいしてなにかしら司法上の報復を望むかと訊いてきました。わたしがけつして望まぬ旨を伝えますと、父はわたしを抱きしめ、このきっぱりとした拒否を受け入れてくれました。

〈しかし、人としては報復を望むだろう?〉と父は言いました。

わたしは黙ってしまいました。アンジェラがわたしの唇を抑え付け、心の動揺を鎮めてくれるような気がしたのです。

〈で、アンジェラは?〉父が質問の答えを待っているときに、わたしはつい口走ってしまいました。自分でもすぐにしまったと思いましたが、父の沈黙が、この懸念の正しさを裏書きしていました。

〈ごめんなさい〉とわたしは言いました。〈お父上と話していることをつい忘れて…友だちと話しているような気になっていました…もつともそれもあながち間違いいはないと思います…〉

このとき兄がやってきて、父が心ならずもわたしを追い込んだ窮地から救ってくれました。父親が口出するときまつて愚かしいことになる、あの種の状況に父を巻き込んでしまったことをわたしは恥じました。

父はすべて知っているが、手紙の内容だけは知らないと言が小

声で耳打ちしたので、アンジェラはどうしているか訊きますと、
《修道院》とだけ答えました。

ディニス神父。わたしはこの言葉を聞いただけで稲妻に打たれたようになりましたよ。もしもっと大きな試練にたいして用意ができていなかったら、わたしは死んでいただいでしょう。そのくらい悲痛な苦しみだったのです。』

『でもなぜそんなお苦しみを?』とわたしは尋ねました。『その娘さんが修道院に入れば、貴殿としてもその方がご安心ではないかと思いますが。修道院ほど安全な場所が他にあるでしょうか? それに、あそこなら少なくとも思う存分に泣く自由だけはありません。』

『たしかに泣く自由はありますが、ディニス神父。ただ、今聞いていただいた手紙で侯爵が言っていたように、娘に屍衣を着せるために修道院から追い出されることになると思えば、恥ずかしくて泣くことになります。』

『娘さんは修練女として入ったのでしょうか? それとも在俗のままです?』

『在俗のままです』

『ということは、貴殿と娘さんのあいだにはなにかしら口外できない厄介な事情があるわけですね。』

『まもなくわれわれふたりにとって恥辱と不名誉になるはずの、厄介な秘密があります。神が弾丸で死なせてくださらなかったの

は、わたしの情熱が引き起こした災難に罰をお与えになろうとすることでしょう。この情熱も、最初はあんな高潔だったのに、世間に揉まれるうちにこんなに見下げ果てたものになってしまいました。』

『このわたしが貴殿になにをして差し上げられますか?』

『していただけることならたくさん: たいへんな助けに: あの娘の救いになります。』

『どのようにすればよろしいでしょうか? さあ、遠慮なく

仰ってください: きつとうまくゆきますから。』

『アンジェラはいまナザレ修道院におります。』

『ナザレに?』

『そこに神父さまとお知り合いの在俗シスターがいらつしやいますね。その方がわたしの愛しいアンジェラの愛天使なのです。』

『おります、たしかに。それならだいじょうぶです。娘さんを救いましょう。』

青年貴族は、慰めに満ちたこの言葉があたりに放つ喜びの光にふれてほっとしたのか、わたしの腕の中に飛び込んできました。

そのお札の言葉とともに流れた涙にはどれほど崇高な感謝の念が表れていたことか! 青年をどうにかひざまづかせないようにはできましたが、手への接吻をとどめるわけにはいきませんでした。わたしの手に接吻しながら『名譽を奪われた不幸なアンジェラよ、あなたもいつかこの手に接吻しておくれ!』と言ってむせび泣き

ましたが、それを聞いてわたしもつい涙を誘われたのでした」

と、突然、眼に興奮を宿し、髪の毛を逆立て、熱で顔を赤らめて、母が神父の足許に駆け寄ってひざまづき、狂ったように手に接吻して、母を立てせようとしている神父の腰ひもにすがりついて、歓喜に震える大きな声で叫んだ。

「そうよ、そうよ、名譽を奪われた不幸なアンジェラは、天使がこの世を旅立つまえに予言した接吻を成就しました！」

そしてわたしの方にふり向くと、

「ジョアン、あなたもひざまづきなさい。あなたの救い主であり、お母さんの救い主である方からあなたの物語を、あなたがこの世にやってくるまでの苦しみに満ちた闘いの物語を聞いたのだから」

わたしはひざまづきました。

わたしは心を奪われたまま、この夢が描く幻のような世界に埋没していました！ 耳にしたのは幸せな恋で結ばれたふたりの男女の物語だったのです。ただ、神父が語った母の不名誉、恥辱の涙、逃げ去った無垢の天使といったいくつかの言葉の意味がわかりませんでした：わたしが理解できなかったこの言葉に、わたしの出生の意味が隠れているのだろうか？ そうだったのです。わざわざ他人に教えてもらうまでもありませんでした。頭のなかでとつぜん何かが閃いて、母の物語の語られなかった部分があつたというまに見えたのです。ただ、わたしの話を読んでくれる人たち

は、それを説明してもらう必要があります。他人の心は、ひとりの息子の心と同じではないのですから。

心を動かされ、疲労を感じた神父は母の腕を取ると部屋に連れてゆきました。

廊下を通っているとドナ・アントーニアがわたしたちを迎えに出てきてくれました。

「そろそろ健康な人にも夜風が体に良くない時間です。ましてやご病気の方には：：いかがなさいましたか、お嬢さま？ 顔が真っ青ですが：」

母はドナ・アントーニアをやさしくそっと抱きしめるところつぶやきました。

「たったいまナザレの話をうかがったものですから」

「いったいなぜそんな話を？」とドナ・アントーニアは応じた。

「ナザレで母親の愛天使だった在俗シスターの御手に息子が接吻できるように」

ドナ・アントーニアは、母が望み、わたしがどうしてもしたいと思ったこと許してはくれませんでした。涙を流しながらわたしを抱きしめてくれましたが、そこにいるだれもが微笑むことになりました。ドナ・アントーニアが、同じくらい的身長のわたしの首にどうにか手をまわそうとあれこれやったからでした。³

- （1）「カミーロ・カステロ・ブランコ著『リスボンの謎』（3）——第一之書、第6章から第9章まで——」（流通情報学部紀要 Vol.18, No.1, 2013）より承前
- （2）距離の単位。一レグア＝五五二七メートル
- （3）都合により、『リスボンの謎』の邦訳は本稿を以て一時中断する。